

人間一生  
獨案内

善惡道中記

全

^ 13

3136

1



へ13  
3136

門へ13  
3136  
巻1

一筆庵戯作  
侯爵英泉函

# 善惡道中記

人間一生獨案内

頂恩堂製

昭和九年  
九月十二日  
購求



## 善惡道中記序

振古の聖賢ハ世を友善ハ後生迄を憐レヨリ善  
 惡邪正の道を説をいッガる此世話と云更勿レ獨  
 慎知を守ル者ハ德行を樂ミ貧富の際ハ惑ハレ  
 一々吉凶を天ハ儘それハ分を量ル不足ガ事ナシ  
 是を知命の達者と云衆人多クハ是を悟ルハ惡  
 人奸富の榮ハ誇リ善人多ク貧困窮ハ徳を  
 失フ者を見てハ幸と不幸の地を換ル天命の

理を通曉さば、道不迷るを案内するを教諭し、便とひある書籍ハ路の標あり。墨翟と云人の岐道を見く、悲しと泣くも迷ん事を思ふ所の十善街道三悪道、右欽左欽、彼方此方、問ざる時は必迷ふ惑ふハ道不闇と云故あり。克本善の道を尋て、巡り遠くといふく、以名聞利慾の捷徑、不入と則行路難山、ふもあは、以川舟をいへ、人生の半腹不在と云抑道の善悪も

知らば、其理を以て押し、公道人情、両なり。全き夏ハ為事難、人情全け、公道を欽、公道全れば、人情を欽、各道に達する所と情不通る所不儘して、其性的と天命の、智者仁人の道、自其道に適く、倘性を知者、盗跖が百年の壽ありとも、短くと顔子が三十二年の天も長くと云ん、飲鶴の千歳ハ猶短く、蟪蛄の一時の期長くと云ん、只足夏を知る時、貧しくなれども富しが如く、足

事を知らざる時を富と以ども貧と如く此西  
岐を悟らざれば浮世の旅小往悩を歩行あらぬ  
経を讀文選小行路の詩あり人生天地の間百年  
孰能要せん頰と石を敵火の如くと長い浮世小  
短の命往も光陰還るも月日仇小遇るを惜気  
も如く暮を六遺感小あらばや人間の一生八腐  
たる長竿の如く枵底の澤庵大根のおと後  
前もてとを正味ハ僅五十年の内外を出を

喜怒哀楽なり。宰し費つ月日を筆し笑  
て暮を日を稀まれなり。是を思おも一時の懈怠を  
そ恐おそるを。嬰い童どう克く爰えん小用心しんして聖賢道  
不ふ姓せい方の本海道ほんかいどうなり赴おもき勢せいと教きょうをい  
者もの身み必かなむ良民りやうみんとあるん。寧な驛えき路ろの道伴  
を撰えらんより。獨ひとり案あん内ないなり。勸くわん善ぜん懲ちやう惡あくの一端  
ともなりん。欲よくと善ぜん惡あく道中記と。

題はる事志らるる

天保十四年歲在癸卯  
秋閏月稿成同十五年  
新春發兌

江戸楓川之市隱

一筆茶亭主人題



原本善惡道中記の飛雄亭の著述也大正の行と云宝曆六年丙子の春の板に繪圖と小冊と合見せり小綴て発市之其後天明寛政の比に至り桃栗山人板發奇の初各なり大通獨案内と題して飛雄亭の作意不做いと繪圖と冊子と合見せりやせし戲作ありやと山東京傳戲作重く悟道獨案内といふも是亦の草子と基事との之種戯好先哲の妙案とあるはと云星霜うつらうつら流行當時の人情のありの事と云ふに全將其趣向を一新し戲作せし拙著と

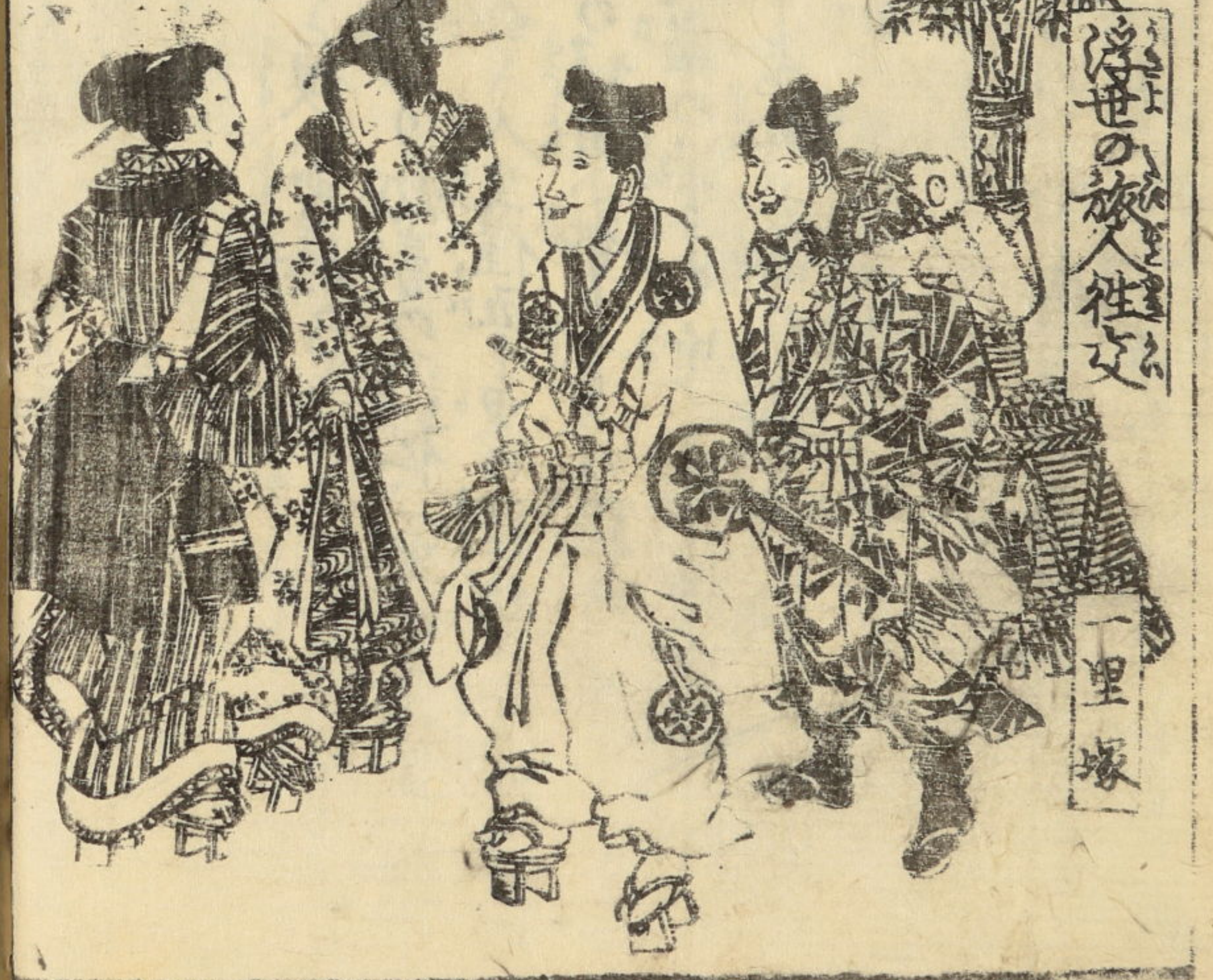
人間生 獨案内 善惡道中記

發端

一筆茶戲作

夏小拙と秀筆を採て旅の耻と俱小書拾せり人間一生浮世の旅日紀四季の國境小十二月の宿次あり初春の門松一里塚の誓一期の榮枯得失深沈の名所旧跡の如く人生僅五十里の驛路と下場の控は宣れも四十箇五重の知命老の坂道小登り下りの難所一係りくま末稀なる七十の峠を越へて定宿の泊りも近く先達の宿行駒の奔馬輕尻歩行ハ簾よりも早老却古郷の近世活表覺て後生大事と輕んぶも金も欲し小命惜く六日限の便りも並便りも輕くもたハ卜の賀漫で行ぬ老體の浮世捨れ非と見せり盡命ありては是も事と云ふは是も短きのと指を爲て筆を長き月日の早くも立て社を傳せども止るもやう暇日今日の日

とある程、川の水絶え  
 流し通すの、是夜を捨  
 夫如き、光陰小園守  
 る、形を忘れ、  
 事、馬の、  
 場、  
 中仕、  
 小油、  
 向、  
 早、  
 道、  
 の、



浮世の旅人往々

一里塚

川苗小路用を、  
 の患あり、  
 宿限、  
 遠、  
 不幸運を、  
 の、  
 身の上、  
 胸、  
 後、  
 偷、  
 面の理を、  
 小、  
 既、



真直小ゆり 質素儉約の心也 倉をまら  
 旗ハ乃づれの居人を素肉として堪忍のつたを  
 杖うて油影あり 道をちりて往若  
 正統山安樂寺へゆつてと云ふ  
 世ふらふ士能くも乳人六人の為  
 さいこのゆりあり 油影のありぬ  
 影あり ちまふ小人をまを  
 ても 墜させま 示油影あり 能く人を  
 のせ 能く 渡らん ともゆり せぬ 乳人  
 復是あり 初見の遇て 怪我をまを  
 とも 小ゆりあり せぬ 目  
 をのせ ねぬ 雲をま 渡あり  
 古後 小ゆりあり 大歌とを  
 家を守る 火の元 小ゆりあり



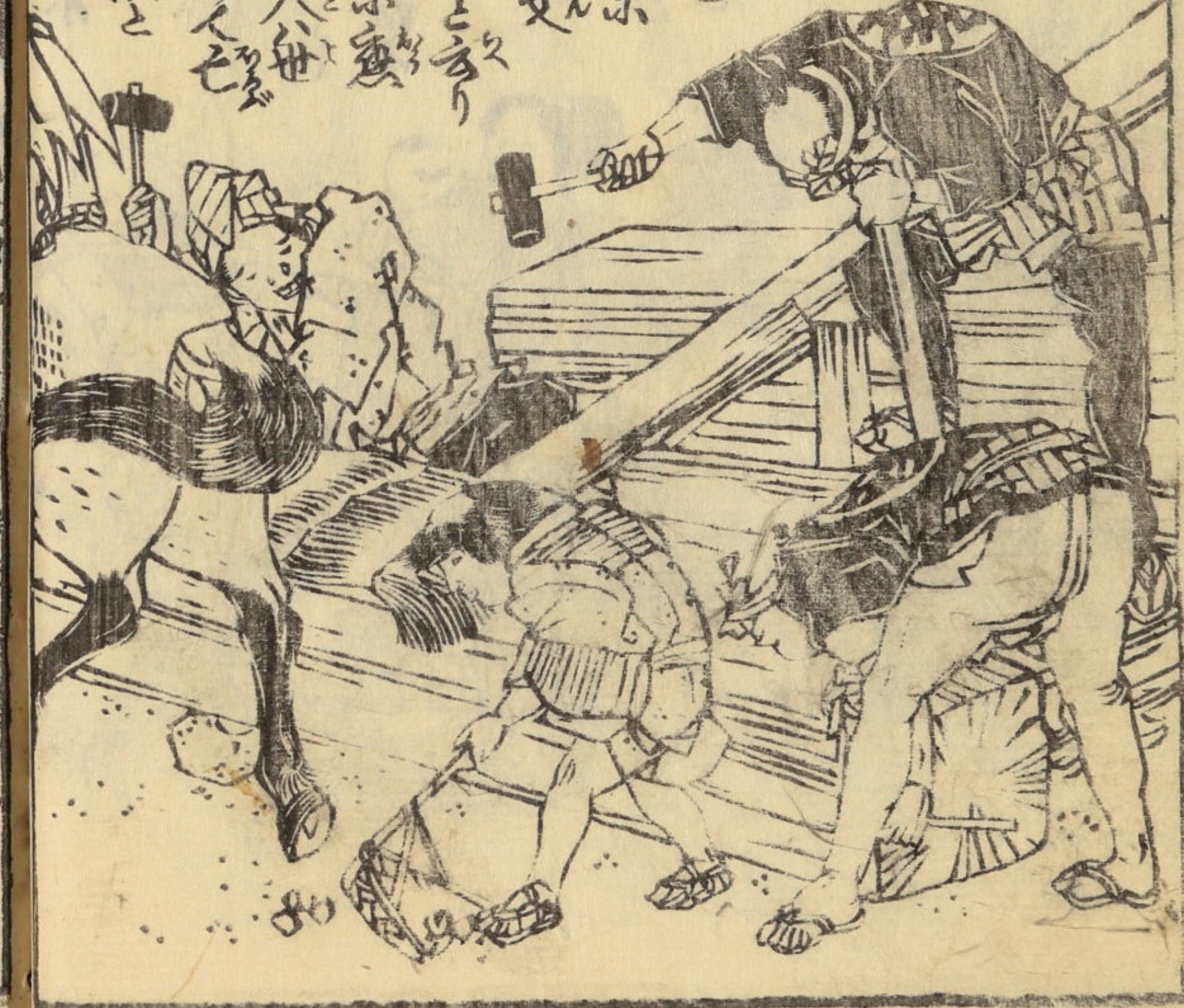
士ハ勤小ゆりあり 農人の耕作  
 ゆりあり 職人の持小ゆりあり  
 商人ハ渡せ小ゆりあり 商人ハ商人ハ  
 ゆりあり 元 渡小ゆりあり 橋  
 首ハゆり小ゆりあり 舟子ハ坂小  
 車ゆりあり 舟ハ橋と船小  
 ゆりあり せぬ 橋ハ大と魚つり小  
 ゆりあり 大ハ橋と低層のゆり  
 小油影 せぬ 橋ハゆり 小ゆり  
 あり 橋ハゆり 小ゆりあり  
 歌ハゆりあり 渡人ハ小  
 あり 小ゆりあり 橋  
 橋をまを せぬ



世の中の人々各々在常の道を守るを主  
 として其指を信ハ聖人の教ふりて  
 この道中死の大意あり  
 常小感小入と儲をめぐり  
 されぬやう小徳のや 非義の  
 密更不七取即分の首代ハ堪忍  
 の半減を坊へ借へて生罪を  
 託る定とありの浮世を二分存と  
 安楽小たる若何れハ春者一刻小  
 千金の僕と高なる雅人あり文  
 字小千金の由成お徳へ古とあり  
 常小油利と堪忍とを守り小徳  
 してまゝ所を勢く考保心あり人世  
 綱をまひて子孫の栄んまをまひて  
 くるのを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と



不化あしるを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と  
 ありてを信も思ハた義を主ハ冷漢と









○日んちく堂ハ  
あまのきつり  
いそぎをまつひ  
下八の  
とんちくの  
たすけ

○日んちく堂

○あまのきつり  
いそぎをまつひ  
下八の  
とんちくの  
たすけ

○あまのきつり

○あまのきつり

○あまのきつり



○日んちく堂ハ  
あまのきつり  
いそぎをまつひ  
下八の  
とんちくの  
たすけ

○日んちく堂

○あまのきつり  
いそぎをまつひ  
下八の  
とんちくの  
たすけ

○あまのきつり

○あまのきつり

○あまのきつり

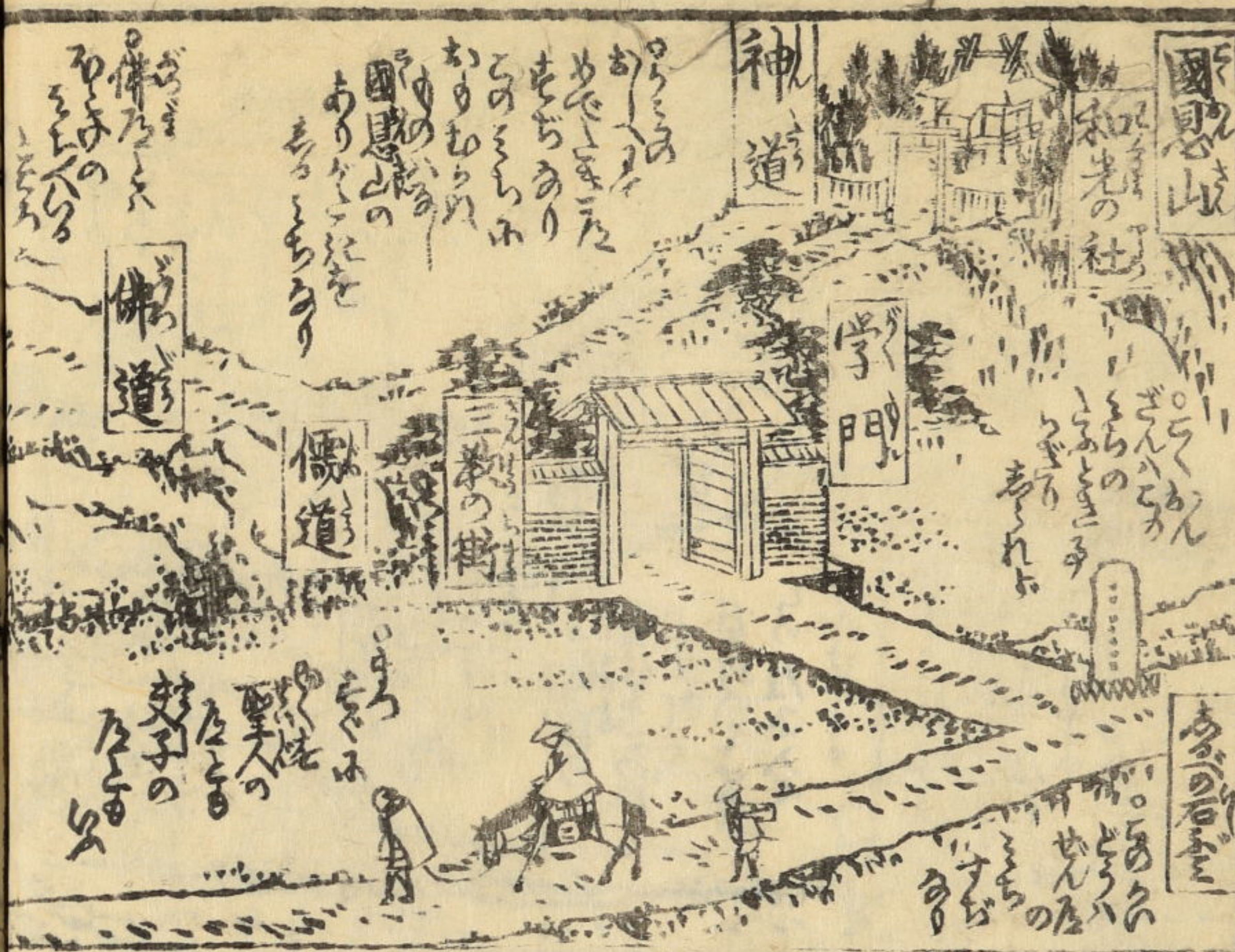
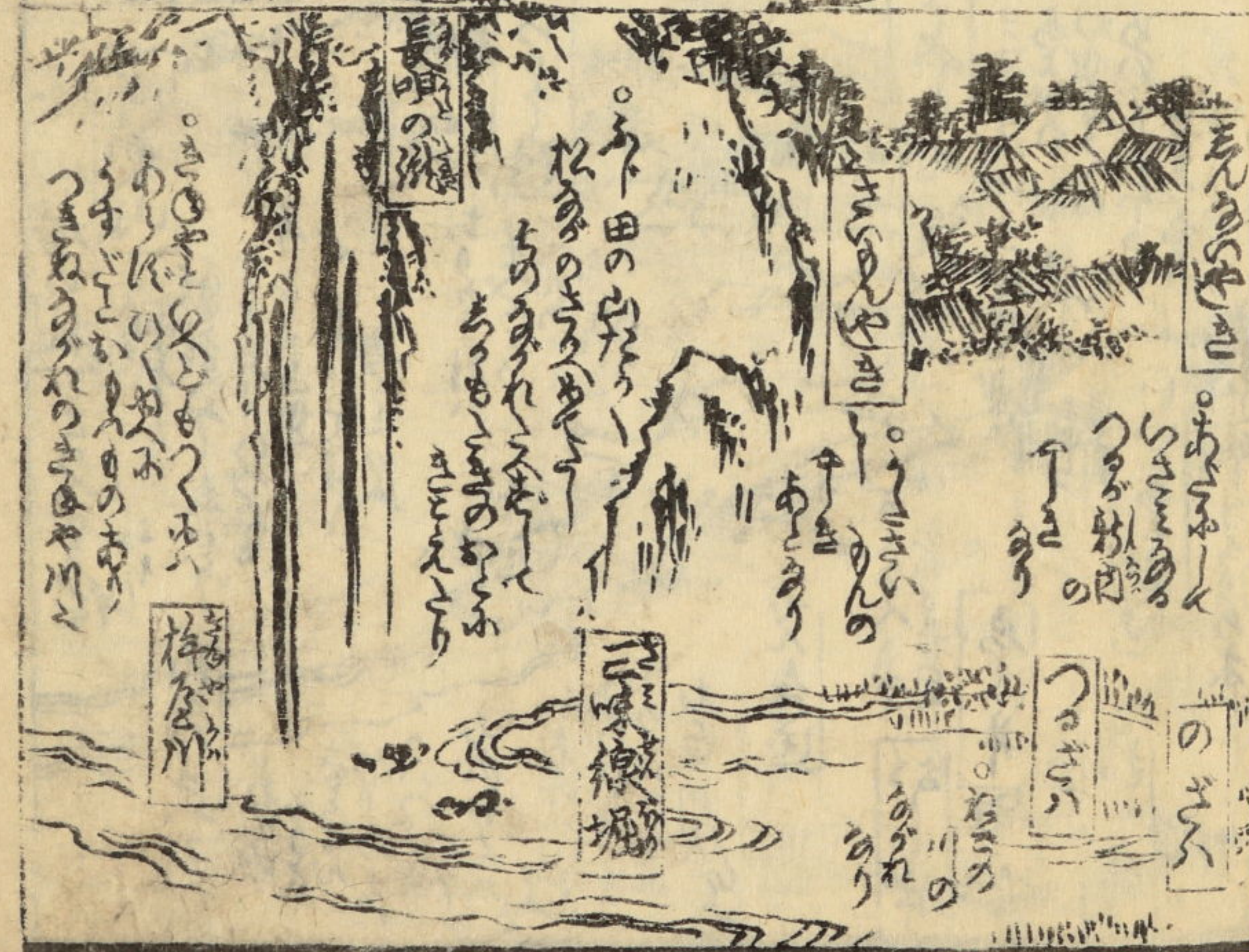
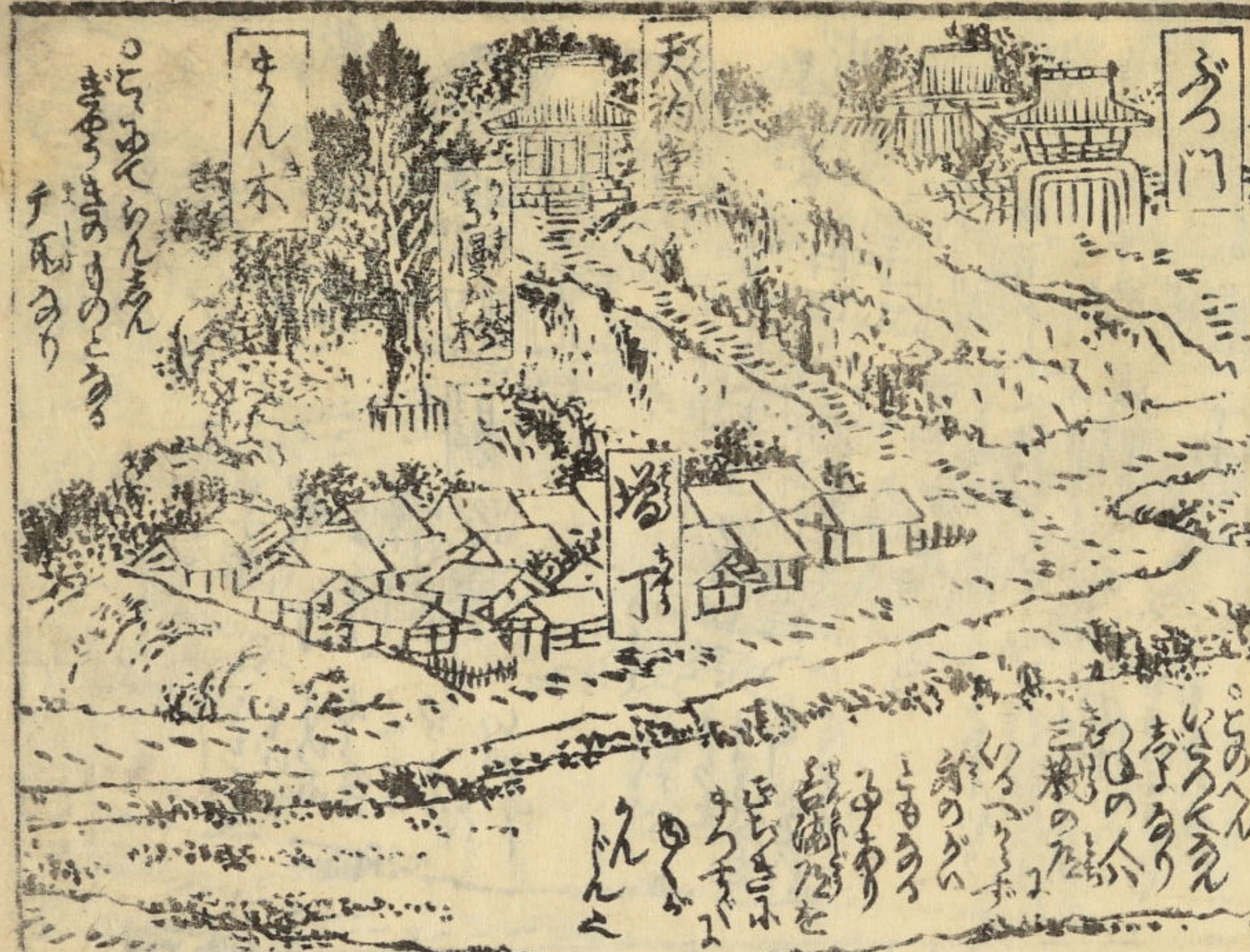
○あまのきつり

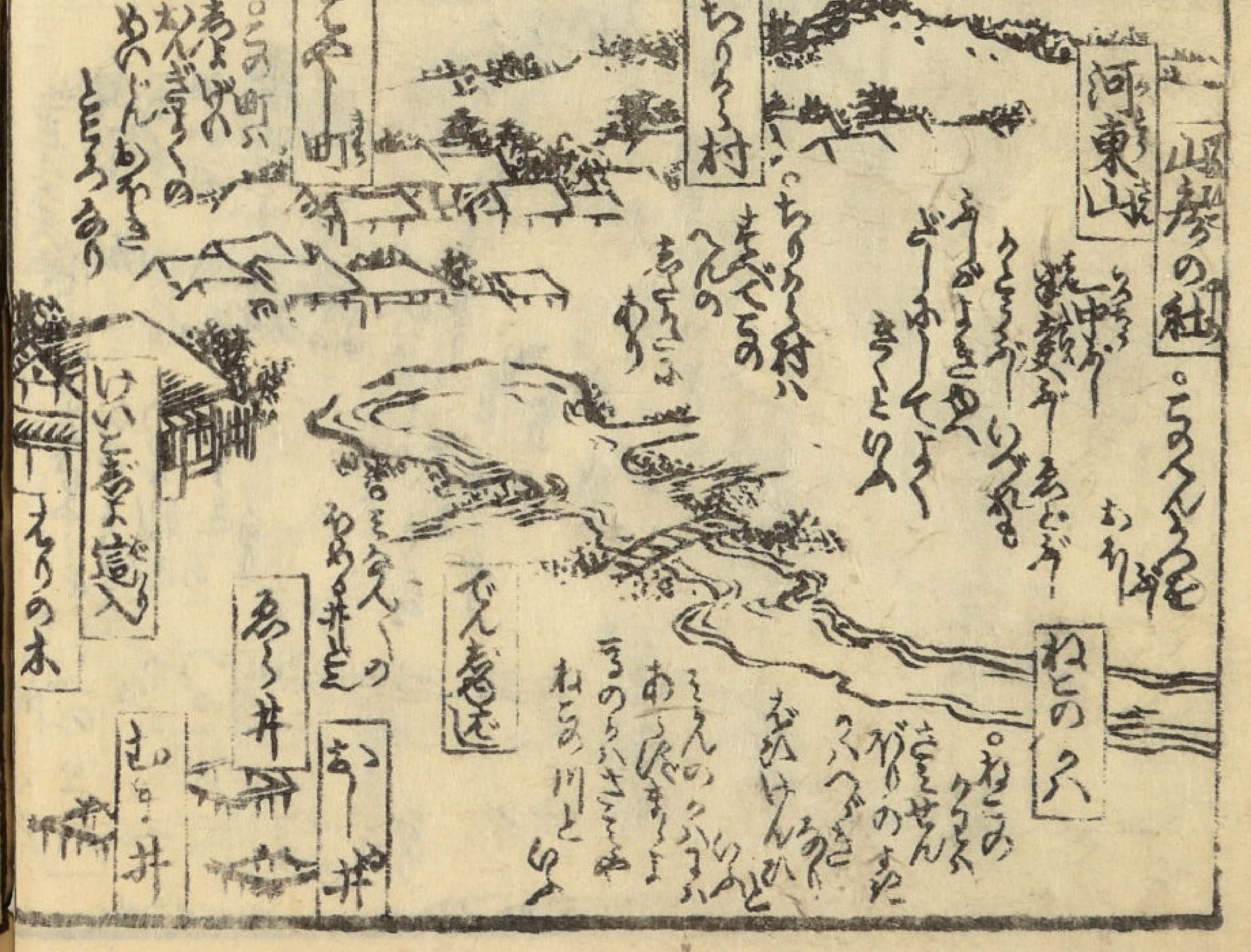
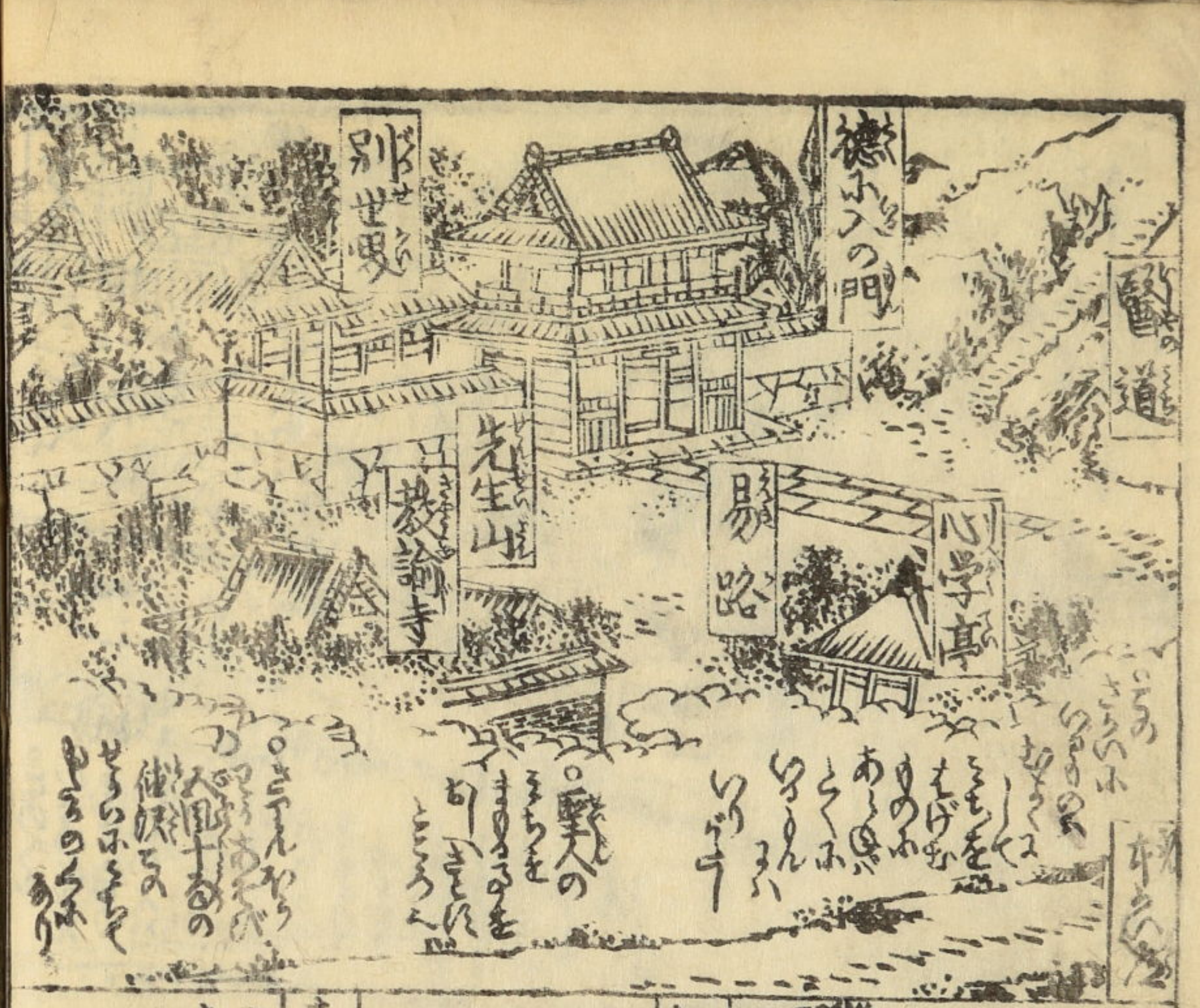
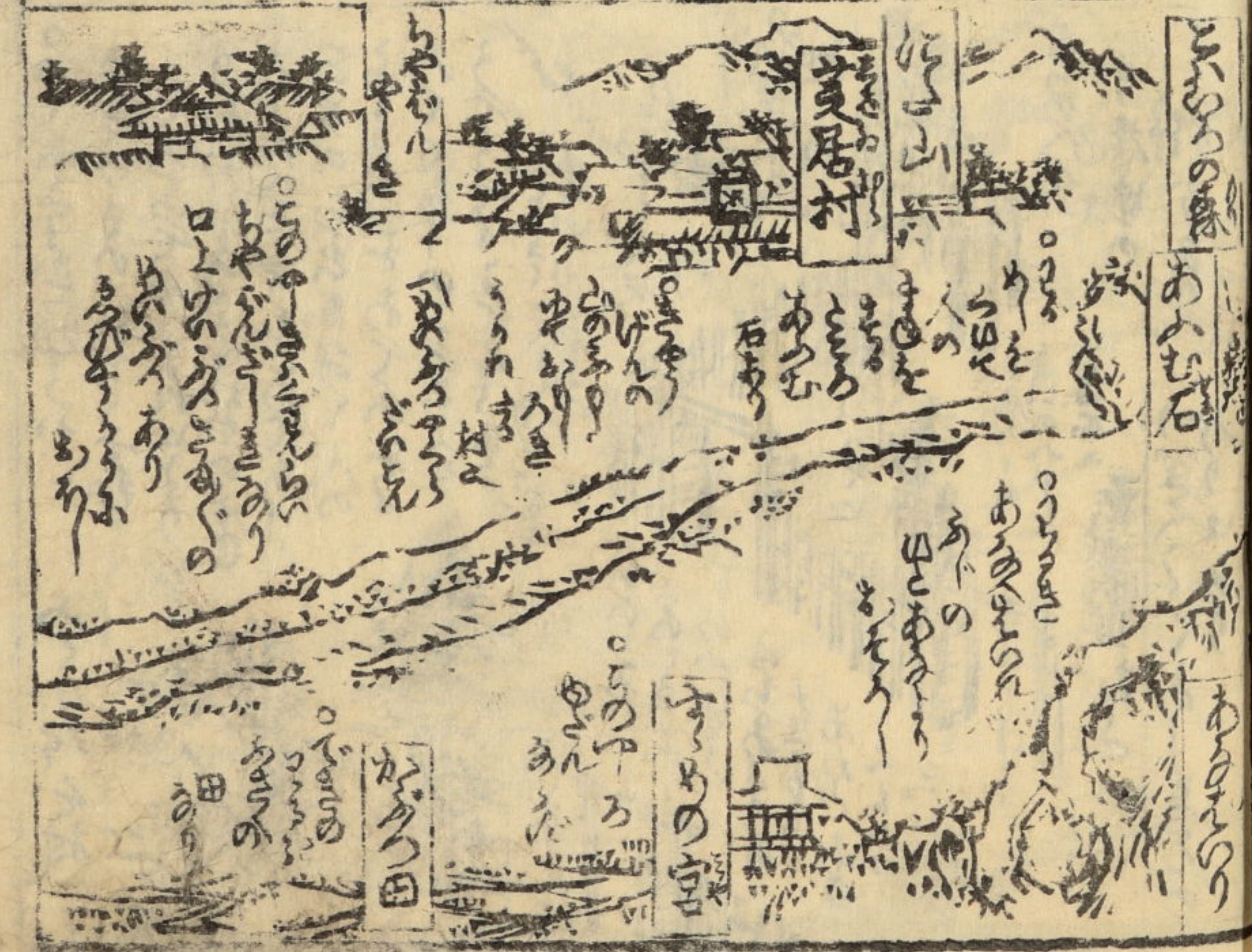
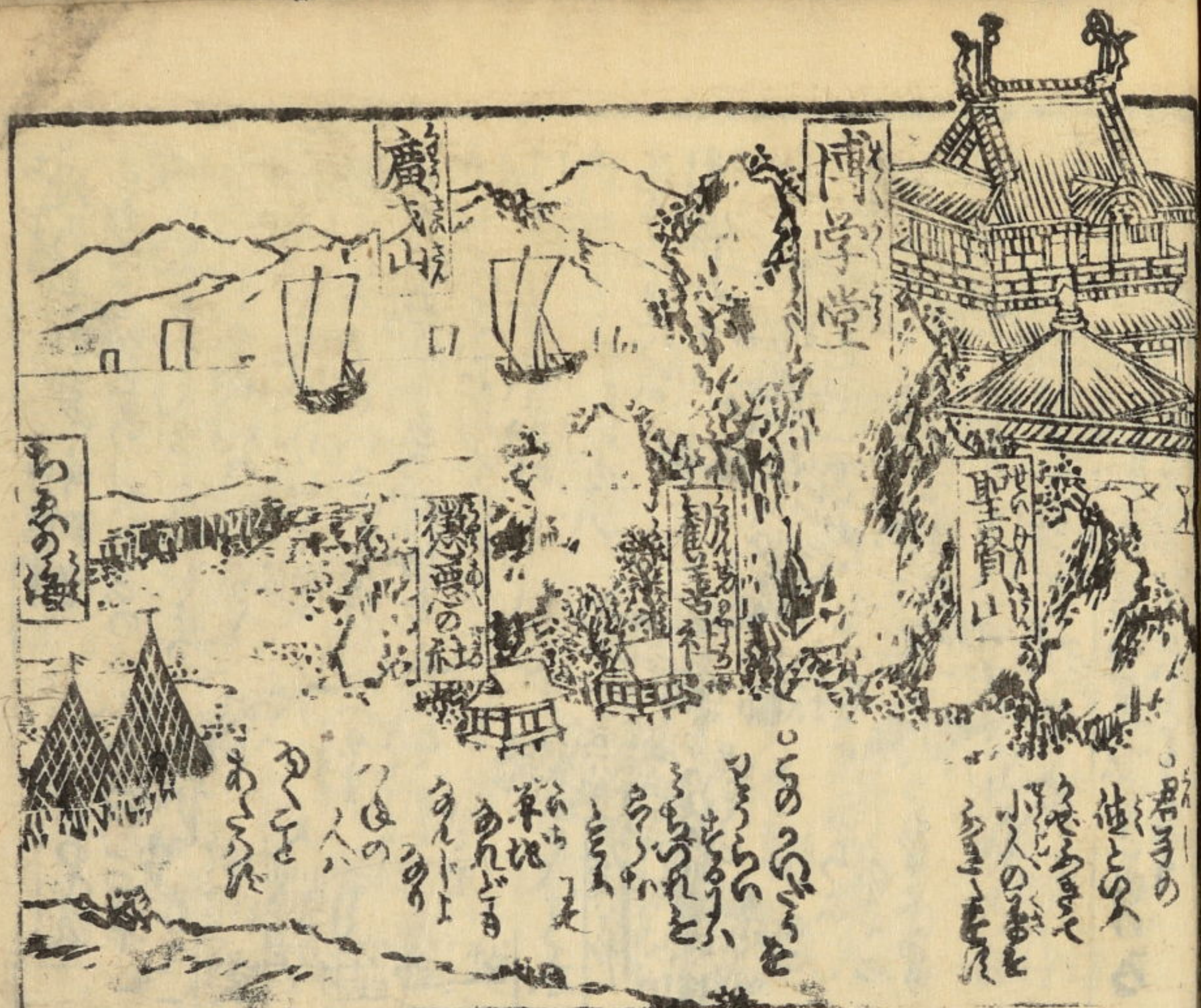




















あまのき  
こいの  
かきつを  
せわひて  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ

あまのた

不夜城

あまの谷

あまの木

生野堂

あまの水

あまの  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ



月都社

田村

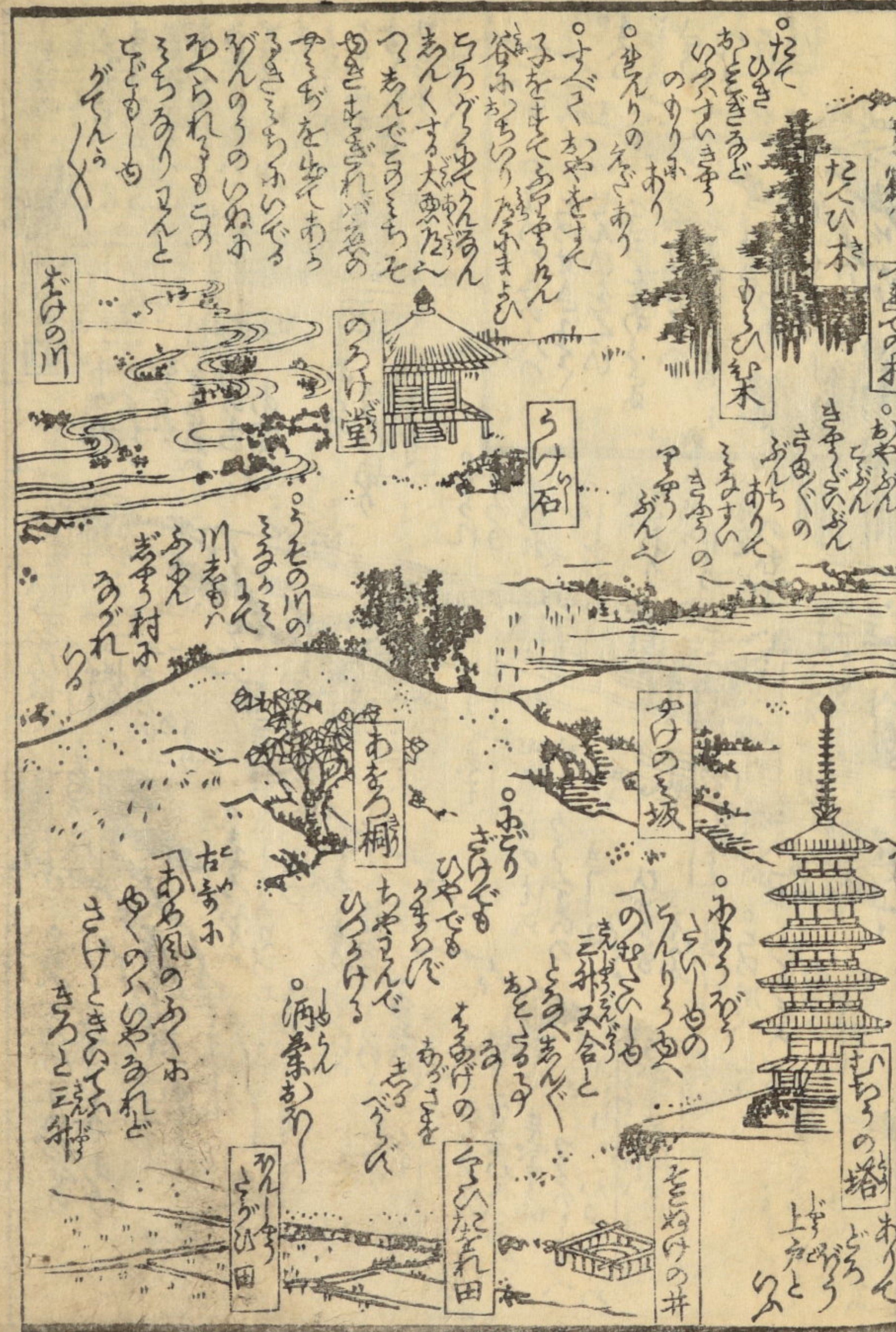
谷金

頭痛体巻

あまの  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ

あまの  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ

あまの  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ  
あまの  
こころ



うその川  
 滝の水  
 有頂天の社  
 巴崎  
 ひのきの洞

たぐひ木  
 りんご木  
 のりけ堂  
 うけ石  
 道の木  
 おやぶん  
 きんぎょの  
 あし  
 まいすい  
 きんぎょの  
 あん

うその川の  
 まま  
 川  
 村  
 ら

あまの  
 けの  
 塔  
 井

あまの  
 けの  
 田  
 井



うその川  
 滝の水  
 有頂天の社  
 巴崎  
 ひのきの洞

たぐひ木  
 りんご木  
 のりけ堂  
 うけ石  
 道の木  
 おやぶん  
 きんぎょの  
 あし  
 まいすい  
 きんぎょの  
 あん

うその川の  
 まま  
 川  
 村  
 ら

あまの  
 けの  
 塔  
 井

あまの  
 けの  
 田  
 井



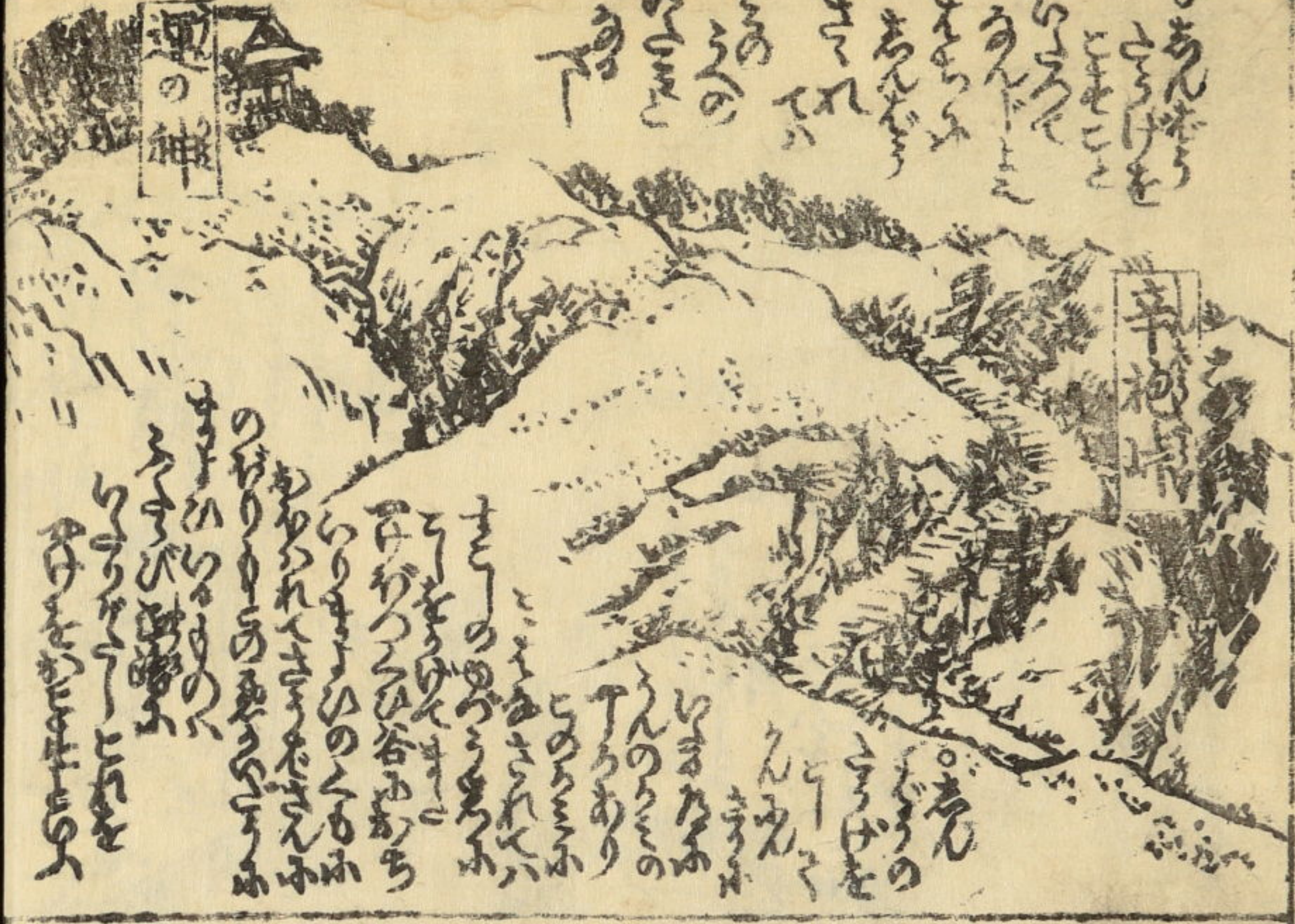


あまのついで  
 下月入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり



あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

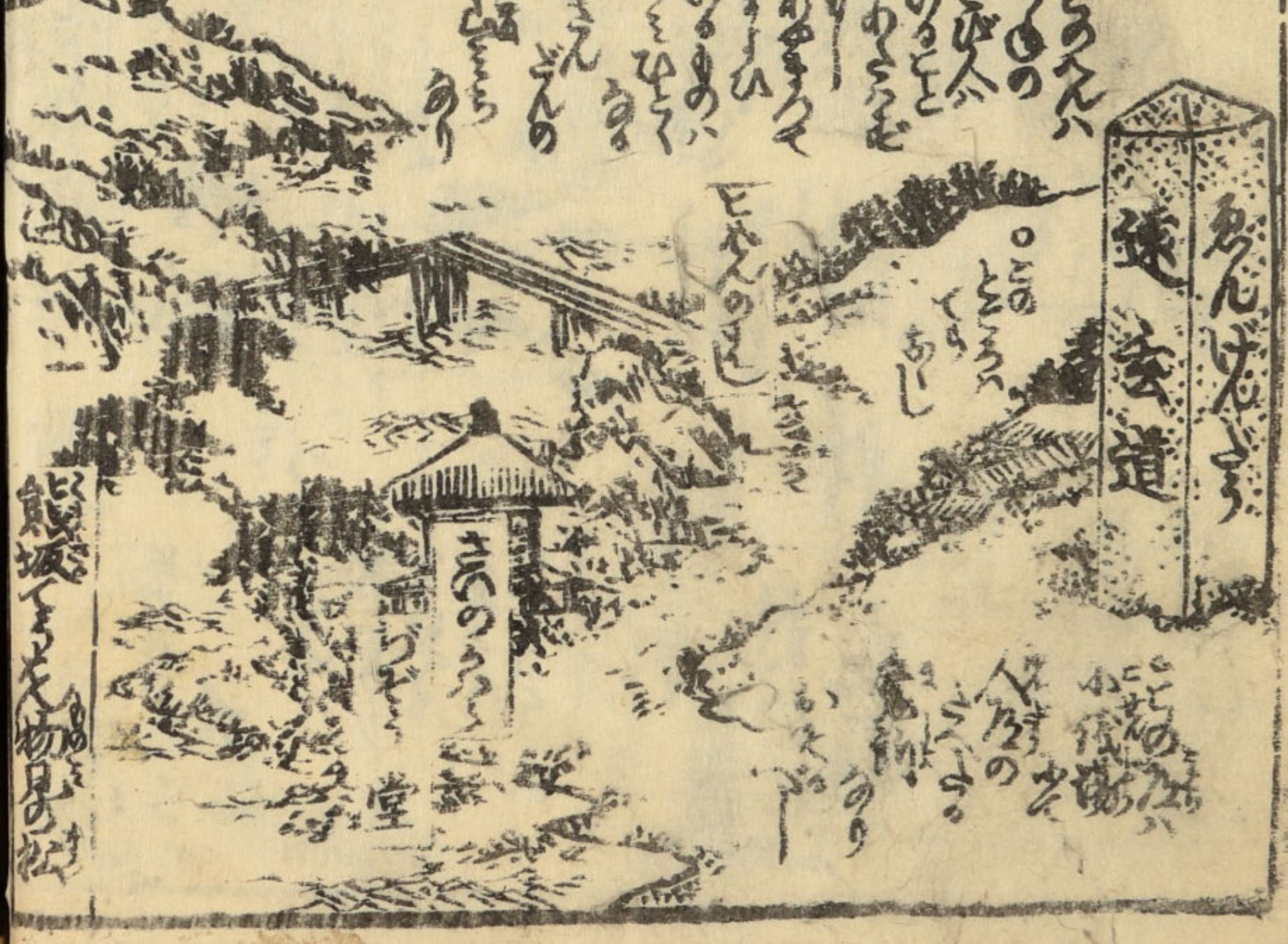


あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

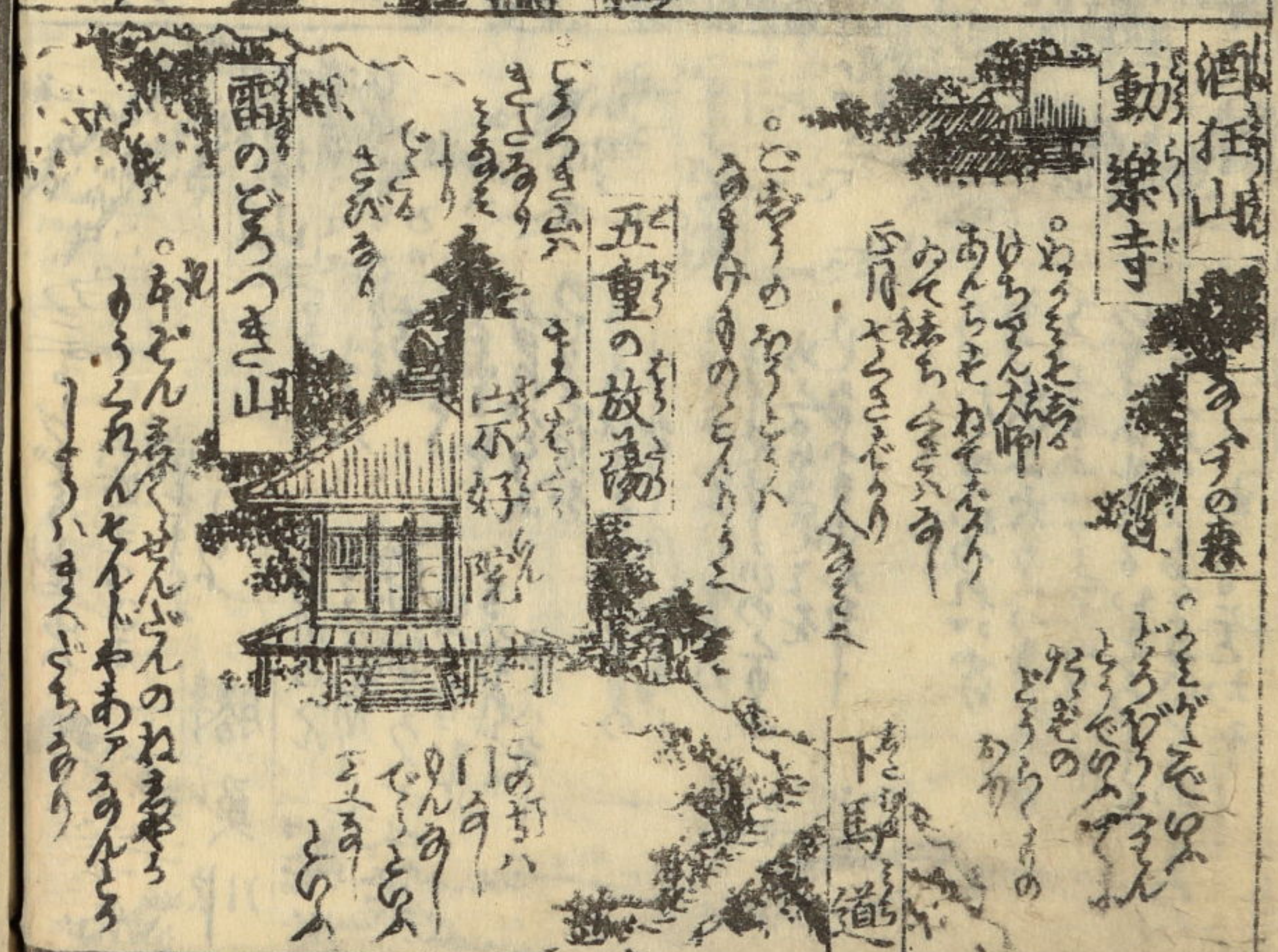
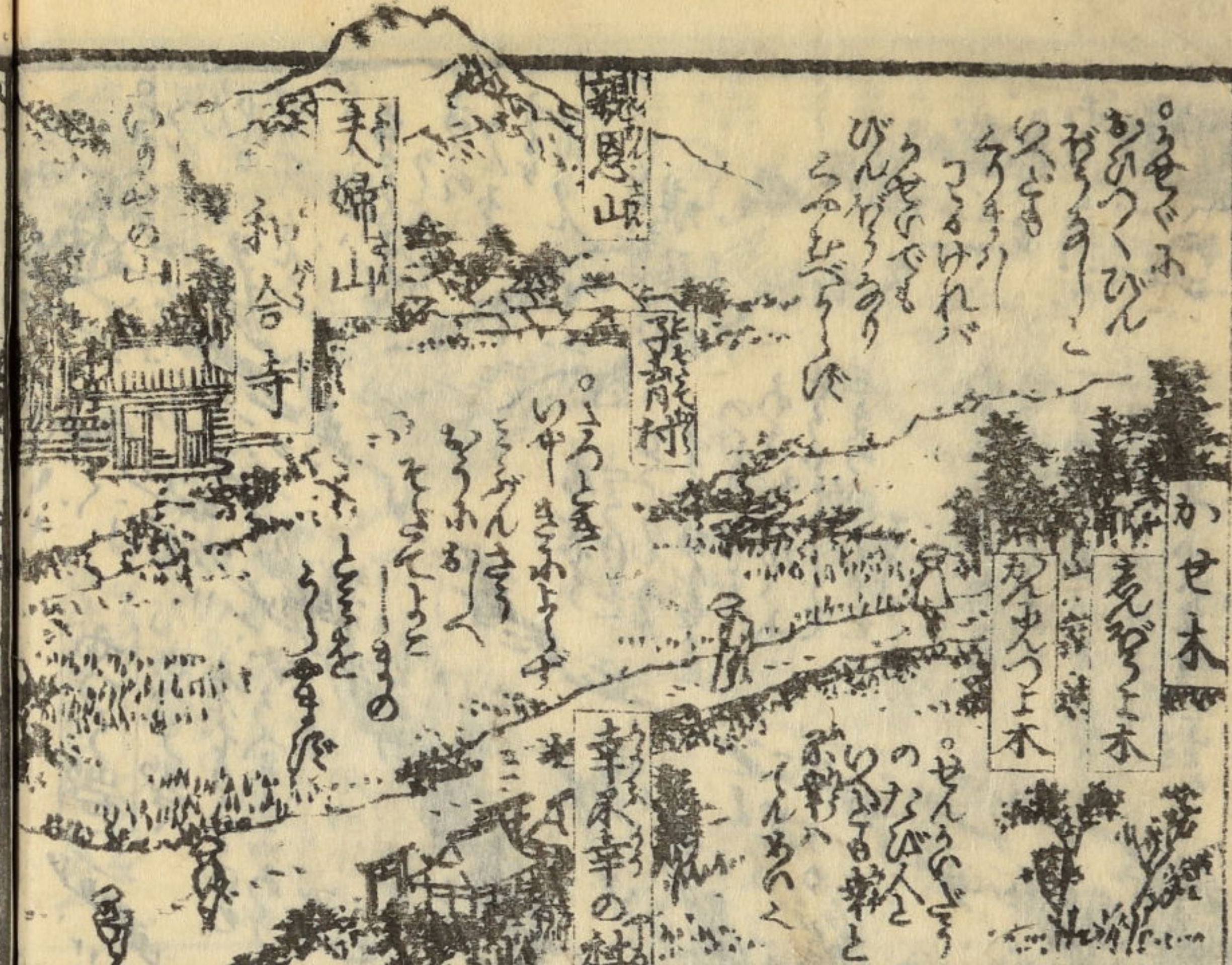
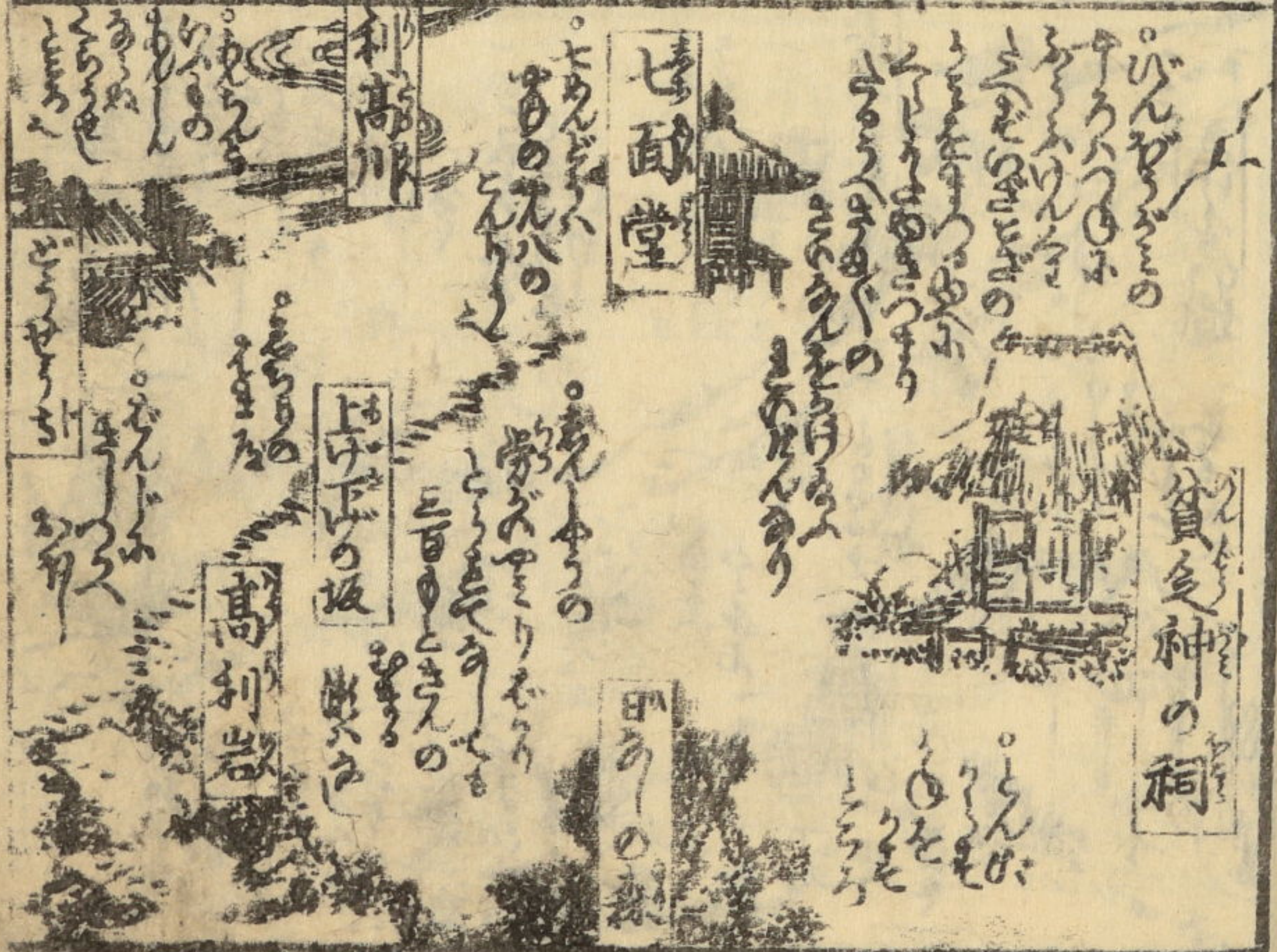
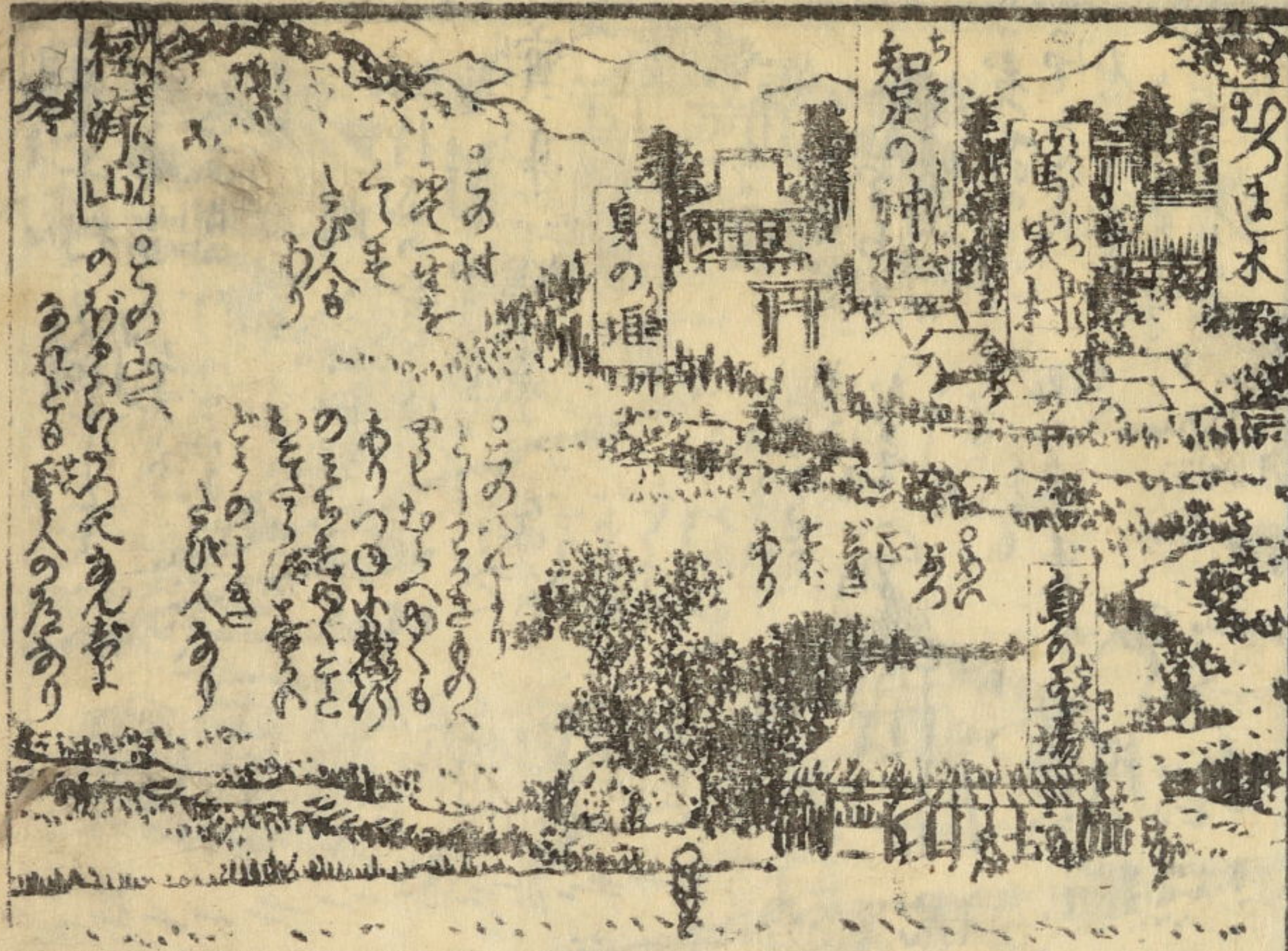


あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり

あまのついで  
 一日小入りのとくあり  
 二十一年小入年のとくあり









二親の塚  
孝心の塚

運の神

○孝心の平ら  
うらまへづことり

○このへんは昔の山を  
あつちのつゆふ

五常村

陰徳の宮



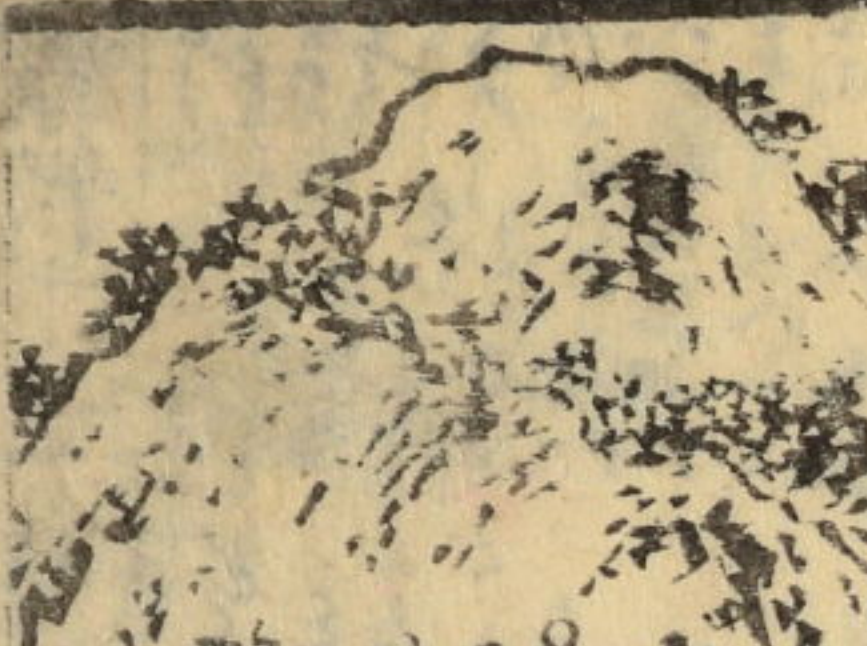
○運の神  
菅原の両道  
菅原の神

あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ  
あつちのつゆふ

身の城郭



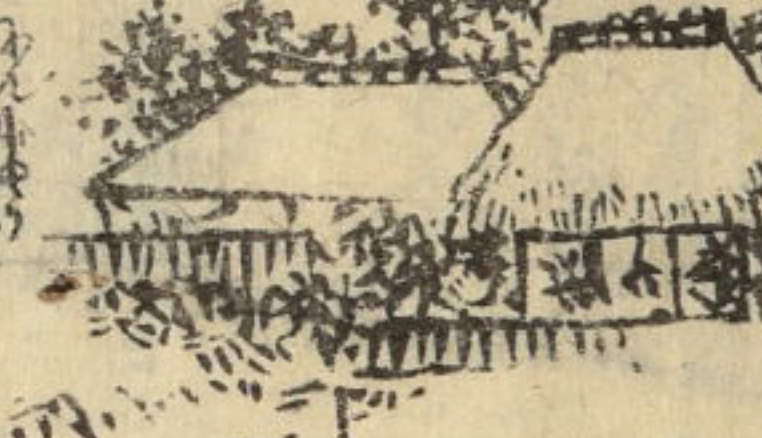
○この山は  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ



出世の御

○この山は  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ

憎亭



○この山は  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ

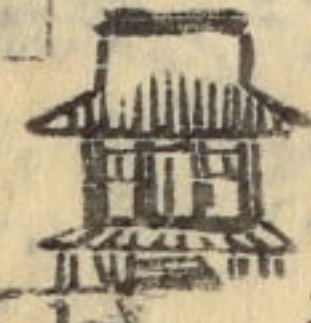
横むらぎの石

耶仕越

果報山

運の神

仕合大明神

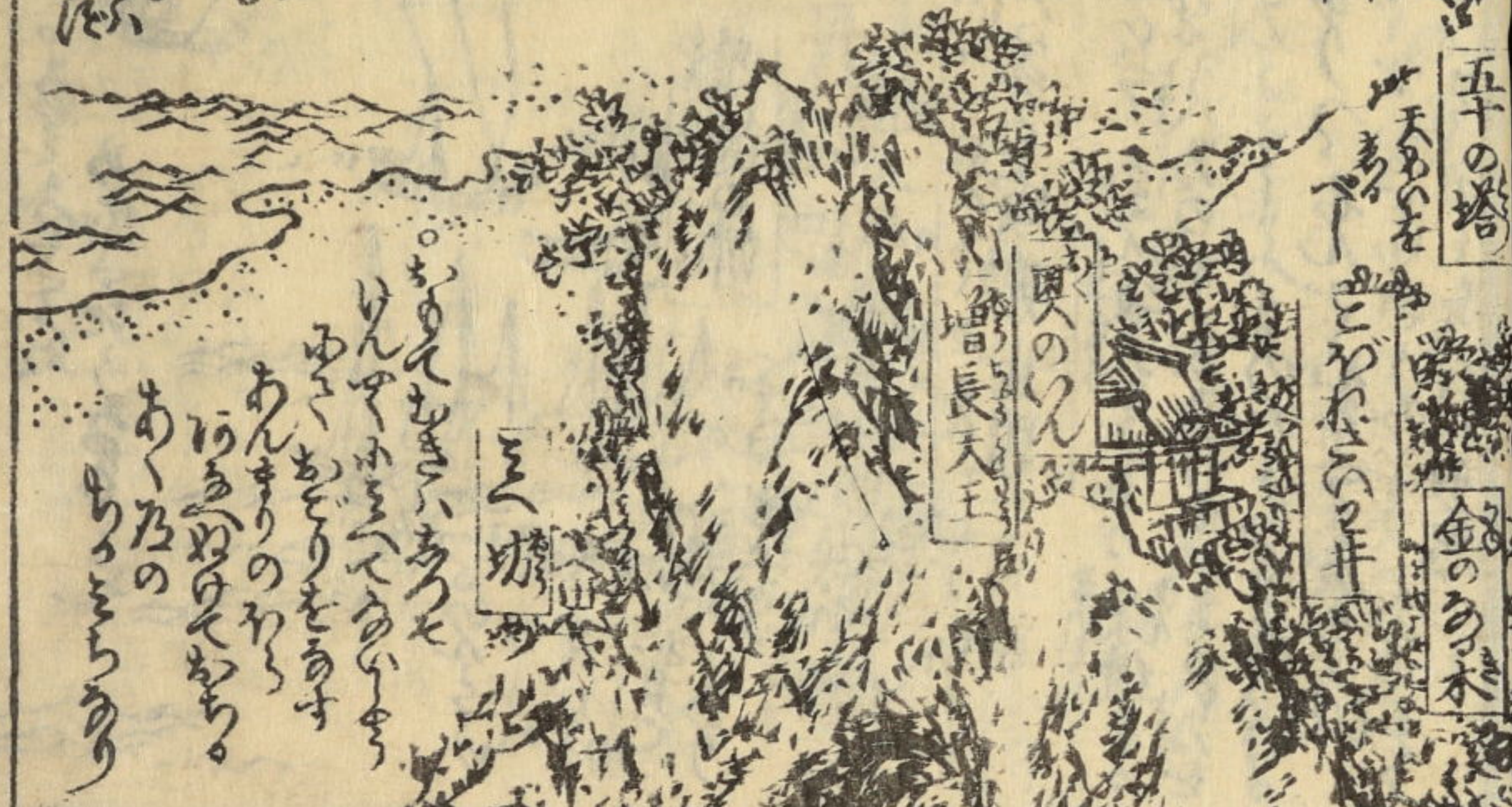


大通神社

○この山は  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ  
このつゆふ

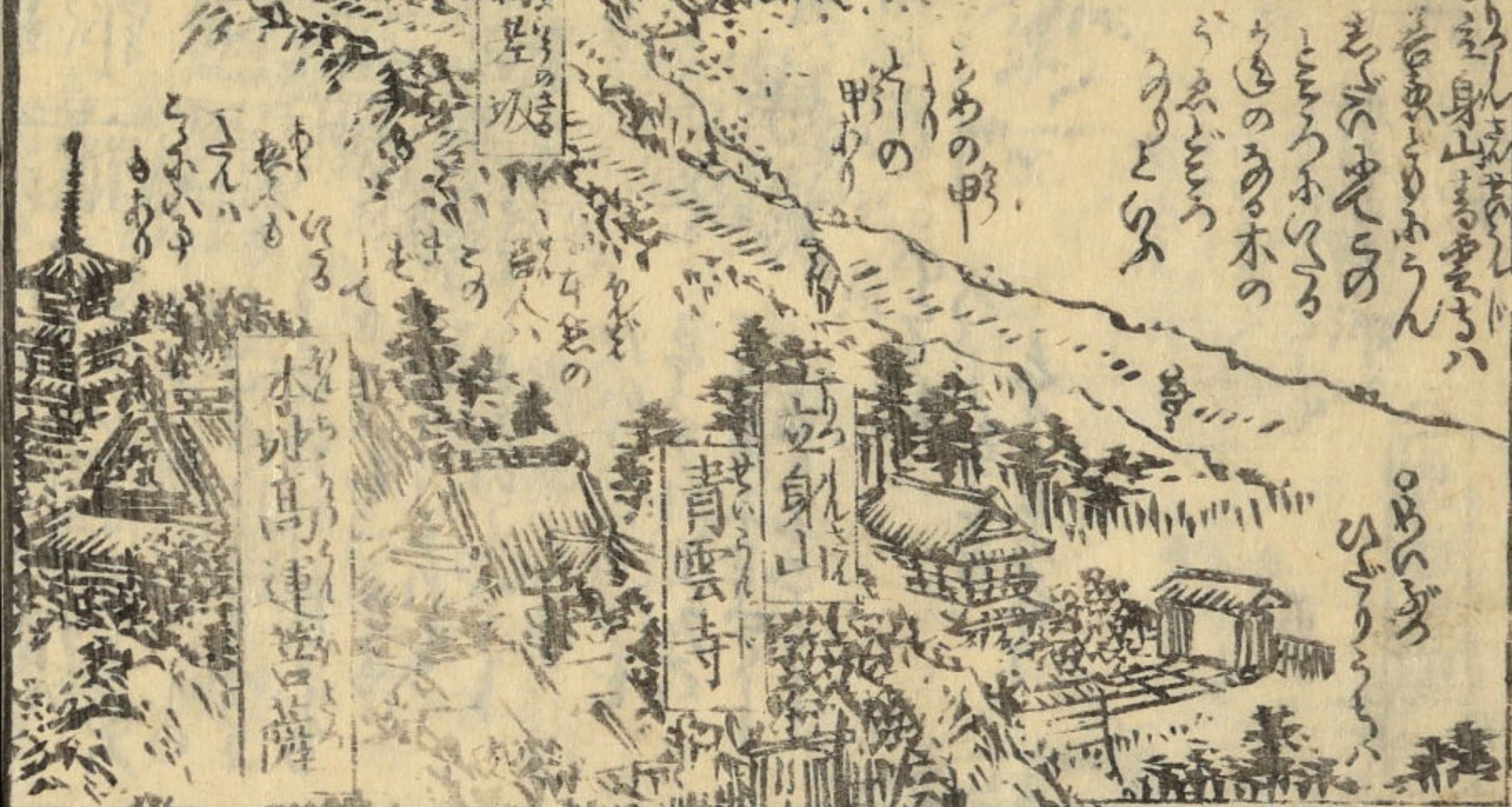
徳俸山

平八郎地  
苦の浦  
樂の海



五平の塔  
金の木  
増長天王  
自り谷  
自り谷  
自り谷

御樂村  
御樂村

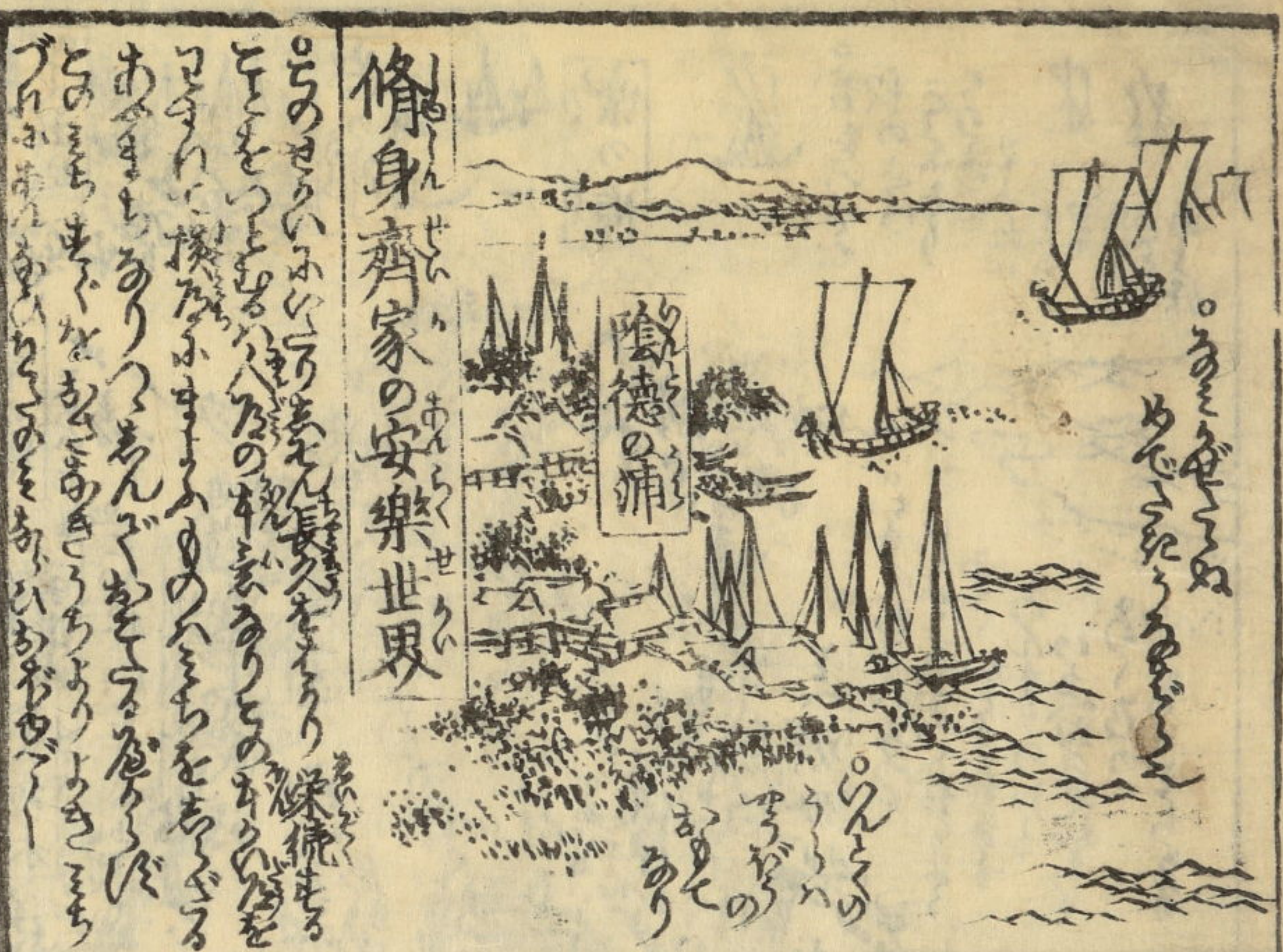


御樂村  
御樂村  
御樂村  
御樂村  
御樂村



天の道

○切あり名とげんや  
ありぞくへんのと  
いありらのと  
ゆるてふとありて  
てありたことあり  
○めでしきま  
めでた  
○この山のつり  
つれれぬと  
よれんけんまの  
まをうけあり  
○この山のつり  
つれれぬと  
よれんけんまの  
まをうけあり



脩身齊家の安樂世界

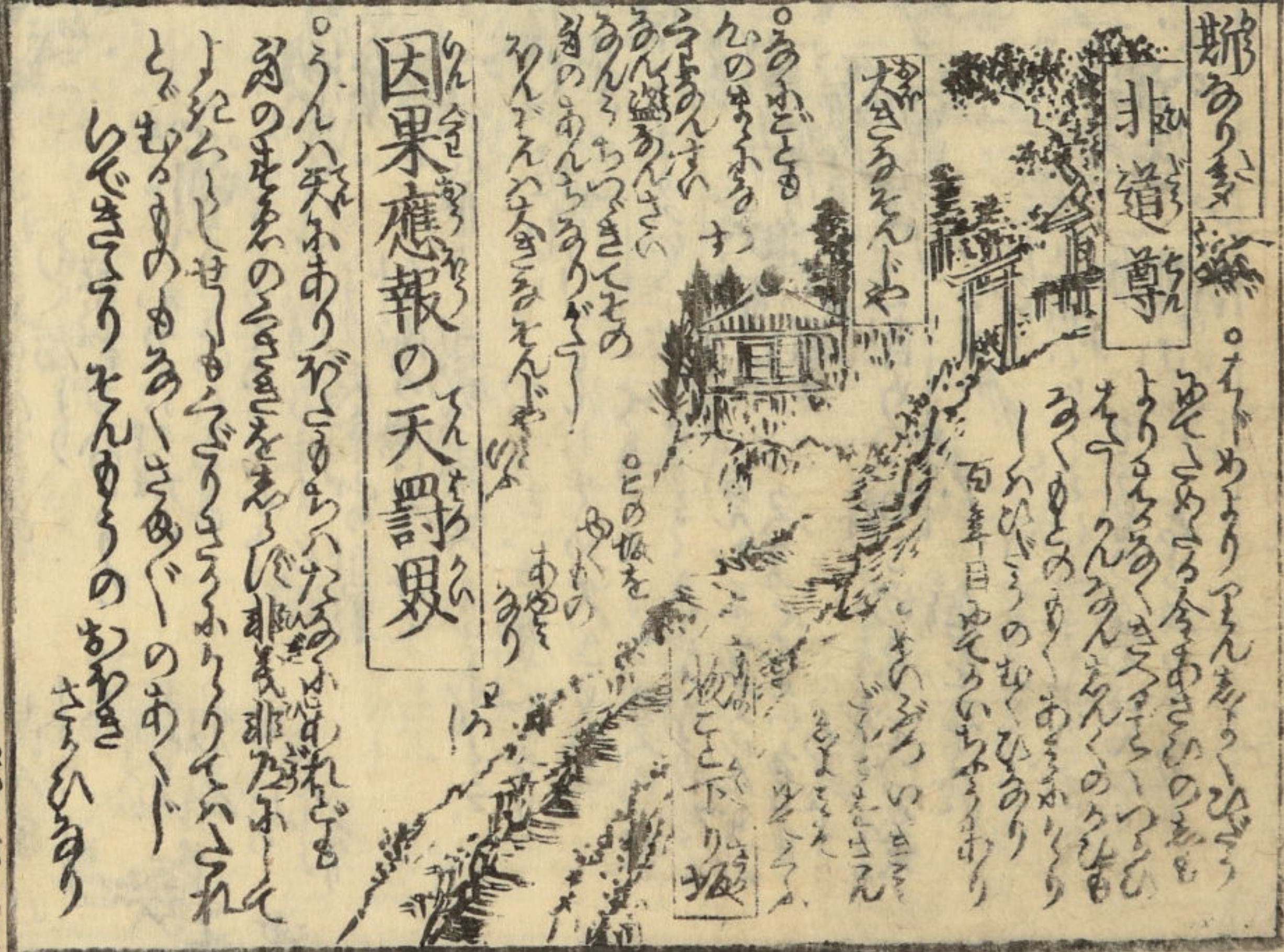
○この世のふいふ  
とをいつと  
○この世のふいふ  
とをいつと



厄除の峯

静人堂

○この世のふいふ  
とをいつと  
○この世のふいふ  
とをいつと  
○この世のふいふ  
とをいつと



因果應報の天罰界

非道尊

○この世のふいふ  
とをいつと  
○この世のふいふ  
とをいつと  
○この世のふいふ  
とをいつと





十八歳...  
 身を...  
 業...  
 の...  
 その...  
 の...  
 の...

世を...  
 代...  
 小...  
 長...

一筆茶主人戯作  
 野...  
 田...  
 野...

教訓貧福悟道捷徑全冊  
 筆茶戯作

此の冊子の善悪道中記の二へ...  
 男女...  
 輪...  
 を...

漢齋英泉画

